

第9章

コロナ禍での高3生の進路選択

—「高校生活と進路に関する調査」（卒業時サーベイ）より—

岡部 悟志*

第9章まとめ

- 大学入試改革をめぐる混乱やコロナ禍に伴う休校などを背景に、2020年の夏時点では、多くの高校生が進路選択への不安を抱き、新型コロナウイルスの影響をネガティブに捉えていました（ベネッセ教育総合研究所，2020）。そのため、高3卒業時の進路決定後も、変わらず負の影響が残ると予想しました。ところが、調査結果は予想と大きく異なり、高3卒業時の「自己肯定感」や「自立に必要な資質・能力（自己評価）」、「大学生活への期待」は例年と比べてネガティブだという証拠は見あたらず、項目によっては高まっていました。
- 2020年の夏時点で落ち込んでいた高3生が、その後の進路選択を経て回復したのは、なぜでしょうか。本調査結果から、少なくとも3つの理由があると考えられます。第一に、例年よりもずっと多くの高3生が、社会問題と真剣に向き合う中で進路選択が行われたこと、第二に、進路情報のオンライン化が進む中、進路選択プロセスにおける教員の影響力が底堅かったこと、第三に、高3生自身が、今回の経験を自ら捉え直し、意味づけを行ったと考えられることです。
- 全体的にはポジティブな進路選択が行われていた一方で、高3生本人のジェンダーや家庭の経済力の差、居住地域の差による見えにくい格差が依然残されたままであることも確認されました。コロナ禍での進路選択のポジティブな側面とリアルな現実とが交錯する中、確かなエビデンスに基づく事実確認と対応とが、よりいっそう求められるでしょう。

*ベネッセ教育総合研究所

1. はじめに

2020年度の高3生は、高大接続の政策議論に基づく新大学入試の第一期生であり、かつ新型コロナウイルス感染拡大に伴う休校を経験した前代未聞の世代（出生コホート）です。本章では、新大学入試とコロナ禍で進路選択を行った高3生に焦点をあて、進路決定後に実施した卒業時サーベイ（「高校生活と進路選択に関する調査」（2020年度））などの結果から、その実態把握と背景要因についての考察を深めます。そのために、大きく2つのアプローチで分析を行います。1つ目のアプローチは、新大学入試より前、かつ新型コロナウイルス感染拡大が起きる前の高3生の進路選択の実態（これを、平時の進路選択と見なします）との比較を通して、コロナ禍での進路選択にどんな特徴が見られるかを浮き彫りにすることです。もう1つの別のアプローチは、高3卒業時に過去を振り返ってもらい、新型コロナウイルスによりどんな影響を受けたかを直接的に回答してもらうものです。高3生本人が環境変化をどう認識し、受け止めているかをベースに分析を行います。以上の2つのアプローチを通して、本章では、**コロナ禍における高3生の進路選択の実態と背景要因に対する正しい理解を深めるとともに、教育実践・政策上の示唆を得ることを目的**とします。

2. 「高校生活と進路選択に関する調査」（2020年度）のねらいと概要

「高校生活と進路選択に関する調査」（前々回の2017年度調査）の概要は、別著（東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所、2020）で詳しく解説していますので、そちらを参照下さい。ここでは、2020年度

調査の調査仮説とそれに対応するための調査設計や新規項目などについて述べたいと思います。

2020年度調査のねらいは、これまでと同様、親子パネル調査の最終学年として高3卒業時のアウトカム（卒業後の決定進路や自己肯定感、自立に必要な資質・能力の自己評価など）を把握することに加えて、今回の調査ならではの仮説として、高3生が直面したコロナ禍での進路選択に、見過ごすことのできない負の影響があることを可視化することがありました。2019年の秋以降、それまで既定路線だった大学入試改革に変更や延期が相次ぎました。また、2020年の春からは、新型コロナウイルス感染拡大に伴う休校があり、休校明け後も学校現場での混乱が続きました。このような状況下で、平時の高3生と比べて充実した高校生活を送れなかったり、進路選択に十分な情報や検討時間が持てなかったりして、納得のいかない高校生活と進路決定を余儀なくされているのではないかと考えました。さらには、しばしばメディアを通して映し出される厳しさを増す就業環境や、大学に通えずリモートでのオンライン授業に参加せざるを得ない大学生の実態を目のあたりにし、将来の見通しや大学生活への期待を持ちにくくなっているのではないかと考えていました。

以上のような仮説を検証するために、2020年度の高3生を対象に、過去の高3生調査と同様の項目、具体的には「高校生活の様子」や「卒業後の進路」のほか、「自己肯定感」や「自立に必要な資質・能力（自己評価）」、これからの「大学生活への期待」や「将来について」を聴取することで、経年での変化の方向性と変化幅を捉えられるようにしました。加えて、過去の調査では聴取していない新型コロナウイルス感染拡大が高3生に与えた影響については、高3生本人にダイレクトにたずねる項目を検討しました。新型コロナ

ナウウイルスの影響はそれぞれの高校生の置かれた状況によって多様であることを踏まえ、影響の程度を量的に把握することに加え、自由に記述してもらう形式の設問も用意することにより、定性的な把握ができるようにしました。具体的には、「新型コロナウイルス感染症が広がったことによって、あなたの進路選択にどのような影響がありましたか」という問いに対して、プラスかマイナスかを7段階で評価してもらい、その理由を自由に記述してもらう設問などです。

3. コロナ禍での高3生の進路選択の実態と特徴

以上で説明したねらいや調査仮説を踏まえて、「高校生活と進路選択に関する調査」(2020年度)は2021年3～4月にかけて実施されました。実査の結果、回収数は991件(回収率68.4%)であり、例年と同水準でした。また、高3生が通う高校の種類のほか、世帯年収や保護者学歴などの基本属性の分布に関しても、前回と比べて目立った偏り

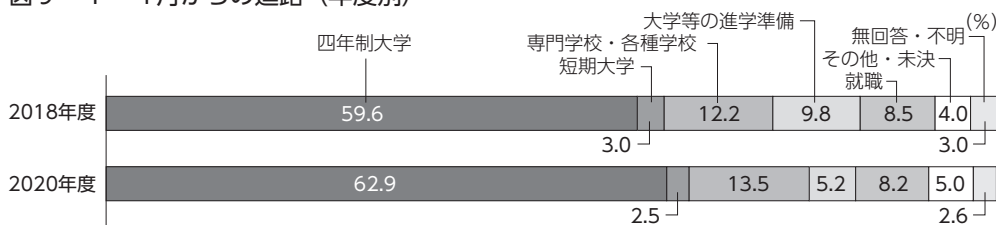
は見られず、先に述べた仮説を検証するための分析データとしては、量・質とも十分なものが得られました。

3.1. 卒業後の進路

2020年度に進路選択を迫られた高3生の卒業後の進路は、それ以前の高3生と比べて、どのような特徴があったのでしょうか。【図9-1】を見ると、「四年制大学への進学が微増し、浪人を含む大学等の進学準備がやや減少している」ことがわかります。「専門学校」や「就職」の比率は大きく変動していないことから、全体的には、「大学進学をあきらめて専門学校への進学や就職をする」ということではなさそうです。むしろ、以前と比べると、もともと大学進学を希望している人は浪人等をするのではなく大学進学を選択するようになっているのかもしれませんが。

【図9-2】は、「私立大学等への進学者比率が減少している」ことを示しています。これは都市部に集中する私立大学への志願者が大きく減った事実¹⁾と整合しています。実際、【図9-3】に示した「同一都道府県内移動

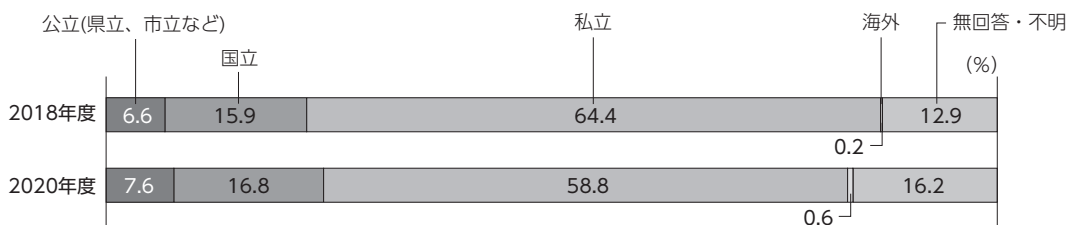
図9-1 4月からの進路(年度別)



※「就職」は「正社員・正職員として就職」「正社員・正職員以外の就職」の合計(%)。

※「その他・未決」は「その他」「卒業後どうするか決まっていない」の合計(%)。

図9-2 4月からの進学先の設置区分(年度別)



※四年制大学、短期大学、専門学校・各種学校への進学者のみ集計。

の増加」についても、そのような現象が反映された結果と解釈することができるでしょう。

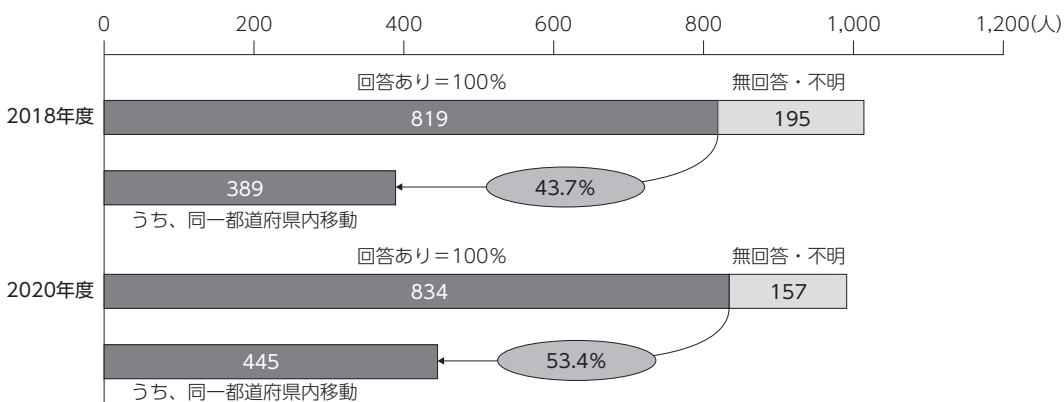
3.2. 「自己肯定感」と「自立に必要な資質・能力（自己評価）」

次に、高3生の「自己肯定感」と「自立に必要な資質・能力（自己評価）」について見てみましょう。エリクソンの発達課題8段階のライフ・サイクル論に従えば、十代後半の高3生の多くは、「アイデンティティ（自我形成）」という発達課題の真っただ中にあります（Erikson, 1959）。一般的には、同世代の友人や先輩・後輩などとの関係性構築や対

話を通して、自己を客観視し肯定的に捉え直す経験をしたり、日々の生活や学びの中で、一定の有能感を得たりすることが求められます。したがって、「自己肯定感」や「自立に必要な資質・能力（自己評価）」は、高3生という時期の発達・成長にとって主要なアウトカムと考えられます。

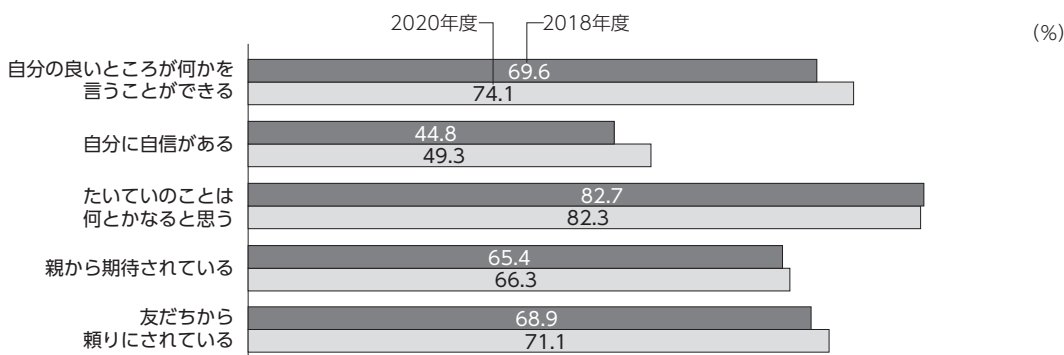
以上のような背景を踏まえた上で、今回の調査結果を見てみましょう。すると、コロナ禍において進路選択を迫られた高3生は、自己肯定感の指標と見なせる「自分の良いところが何かを言うことができる」「自分に自信がある」比率が例年よりもやや高く【図9-4】、ふだんの生活や学び、社会関係の形成

図9-3 4月からの進学先・就職先の所在都道府県（年度別）



※高校卒業時の居住都道府県と4月からの進学先・就職先の所在都道府県の一致・不一致から算出。
※横棒グラフ中の数値は該当する回答者数（人）。

図9-4 自己肯定感など（年度別）



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

といった場面で発揮される資質・能力(自己評価)についても、例年よりも高いことが分かります【図9-5】。これらの結果は、「2020年度の高3生は、例年よりも強く負の影響を受けているのではないか」という予想(仮説)からすると、やや意外に思えます。はたして、これらの意外な傾向は、高3生が抱く「自分の将来について」や「大学生活への期待」にも、あてはまるのでしょうか。次の項で見ましょう。

3.3. 将来についての見通しと 大学生活への期待

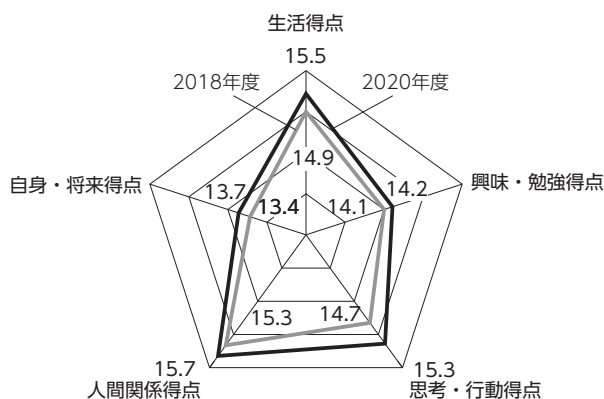
コロナ禍において進路選択を迫られた高3生は、これから先の将来についてどのように感じているのでしょうか。また、高校卒業後に大学へ進学する人は、大学生活について、どんなことを期待しているのでしょうか。調査結果を見てみると、調査前の予想とは異なり、これからの将来に対して例年と大きく変わらない見通しをもっていることが分かりました【図9-6】。また、大学進学者にたずねた大学生活への期待についても、肯定率が例年よりも低いという証拠は認められず、「と

てもあてはまる」と答えた比率は、むしろ上昇さえしていました【図9-7】。なお、図表は省略しますが、進学する大学の入学難易度別に見ても同様の傾向でした。つまり、進学する大学の難易度によらず、大学生活に高い期待をもっているということを意味します。データから見える2020年度の高3生は、自分の将来や大学生活について過度に悲観している様子はありません。むしろ、項目によっては前向きに捉えていることがうかがえます。

4. ポジティブな反応の背景にある理由

3節で見たように、高3生の卒業時の「自己肯定感」や「自立に必要な資質・能力(自己評価)」、「将来について」の見通しや「大学生活への期待」などのアウトカムは、いずれも例年と比べて低くなく、むしろ高い項目さえあることが分かりました。これは、当初私たちが考えていた予想とはかなり異なる結果でした。以下では、なぜこのような結果が得られたのか、考えられる背景や理由を探り

図9-5 自立に必要な資質・能力(自己評価)(年度別)



※高3生の自立度を「A. 生活(決めた時間に起きること、整理整頓など)」「B. 興味・勉強(興味を持ったことの深め方、勉強へのやる気など)」「C. 思考・行動(自分の意見のまとめ方、意思決定など)」「D. 人間関係(人の話を聞くこと、自分の意見を伝えることなど)」「E. 自分自身・将来(新しいことへの挑戦、将来やりたいことなど)」の5つの視点から得点化した。各視点5項目ずつ、合計25項目の自己評価から算出した。数値は、それぞれ4段階で評価してもらったものを、A~Eごとに合計したスコア(5~20までの値をとる)の平均値。

ます。本調査の聴取項目の範囲に限られますが、少なくとも3つの理由があると考えられます。

4.1. 「社会問題について真剣に考えた」

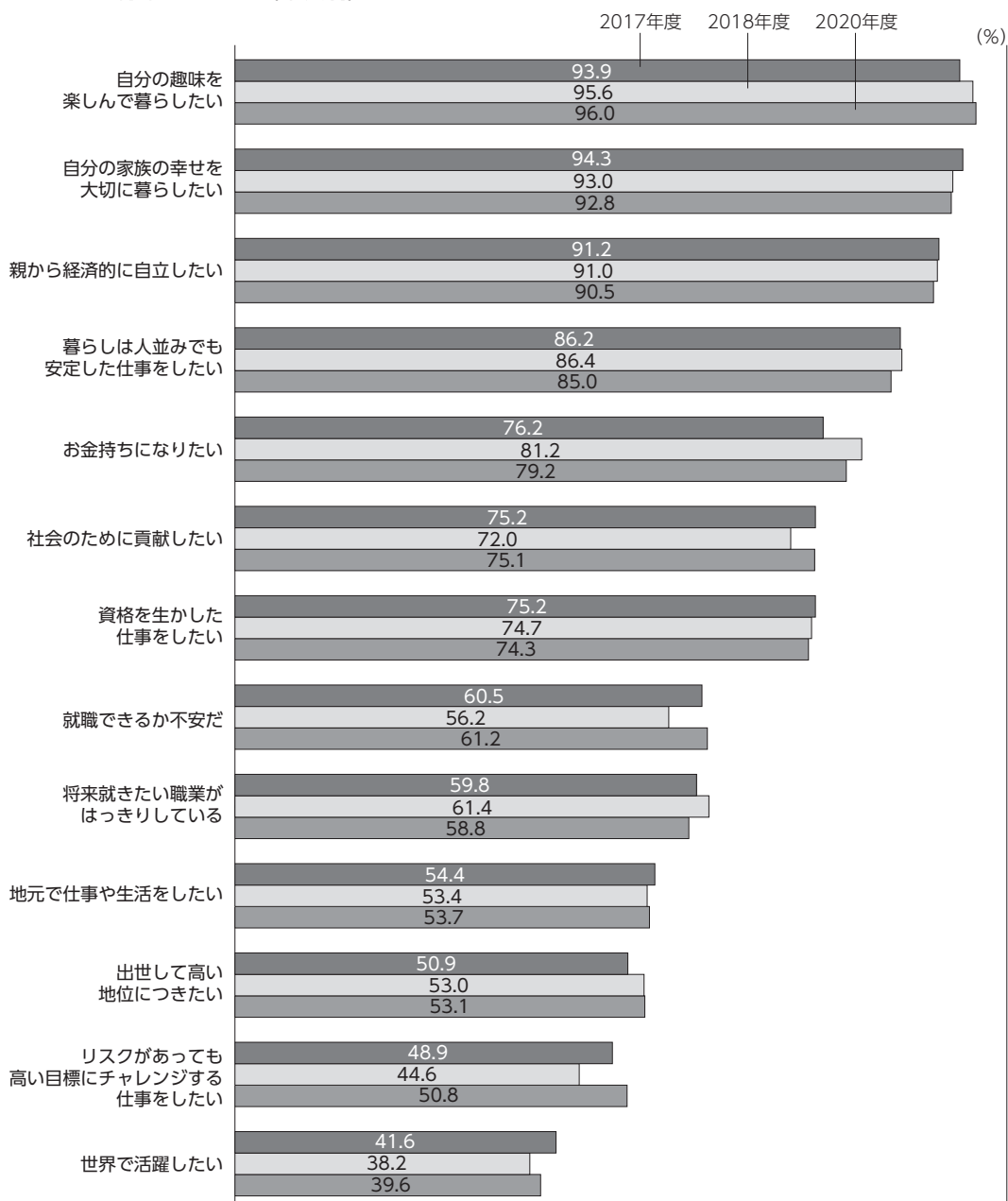
高校生が大幅増

本調査では、高3生にこれまでの高校生活

を振り返ってもらう設問を用意しています。

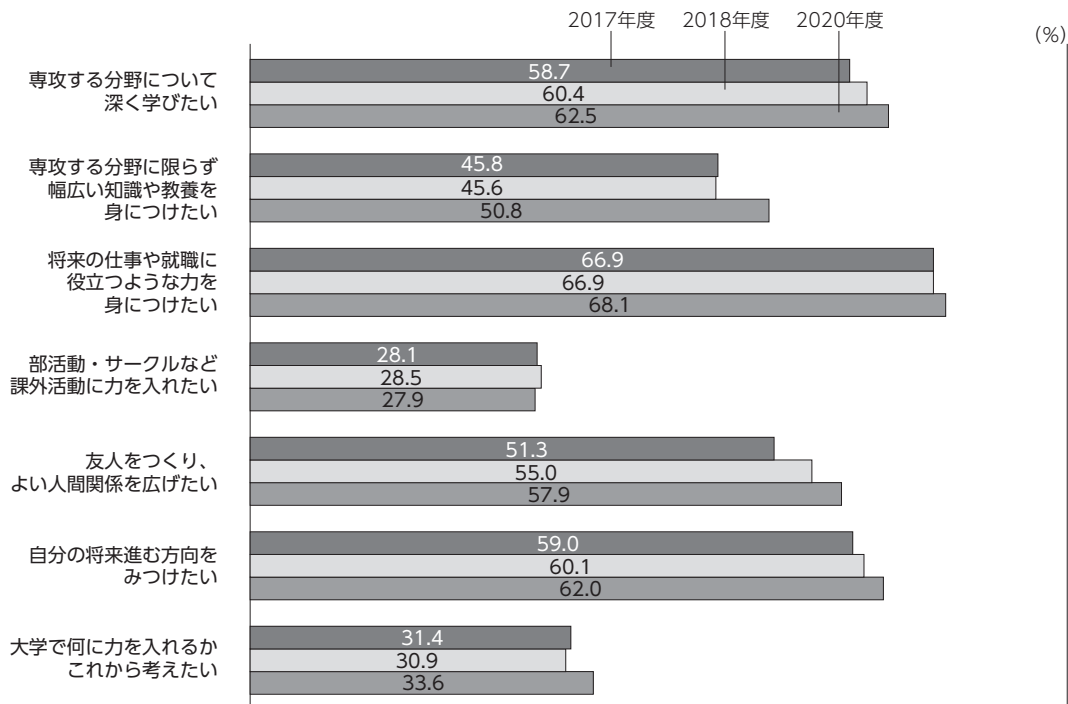
【図9-8】を見ると、高校3年間の成長実感や満足度については、これまでと同様か、若干高い水準をキープしている中、一番下の「社会問題について真剣に考えた」比率が大幅に増加していました（2018年度：38.5% < 2020年度：52.8%。14.3ポイントの増

図9-6 将来について（年度別）



※ 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」の%。

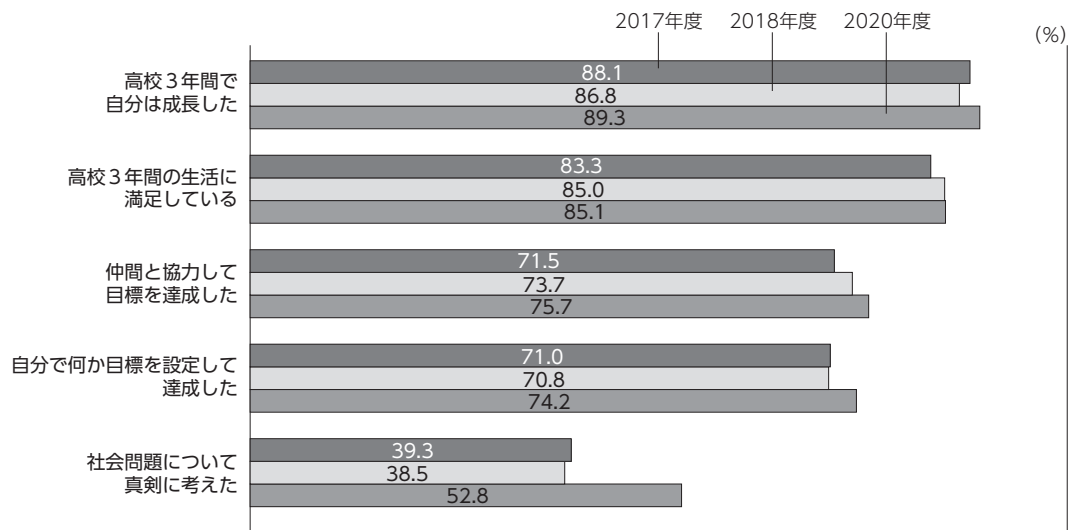
図9-7 大学生活への期待(年度別)



※「とてもあてはまる」の%。

※四年制大学、短期大学への進学者のみ集計。

図9-8 高校生活3年間の振り返り(年度別)



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

加)。今回行った調査の中で、もっとも大きな変化です。一方で、【図9-9】に示したように、「進路選択の主体性」を示す「自分の意思で進路を選択した」「自分の進路について真剣に考えた」「自分から進んで進路に関する情報を収集した」は下がることはなく、項目によっては若干上昇していました。以上を踏まえると、例年よりも「社会問題について真剣に考えた」高3生が、例年と同じかやや高い水準で主体的に進路選択を行う中で、高い成長実感や満足度を得たといえるかもしれません。

4.2. 進路決定における「高校の先生」の影響力の底堅さ

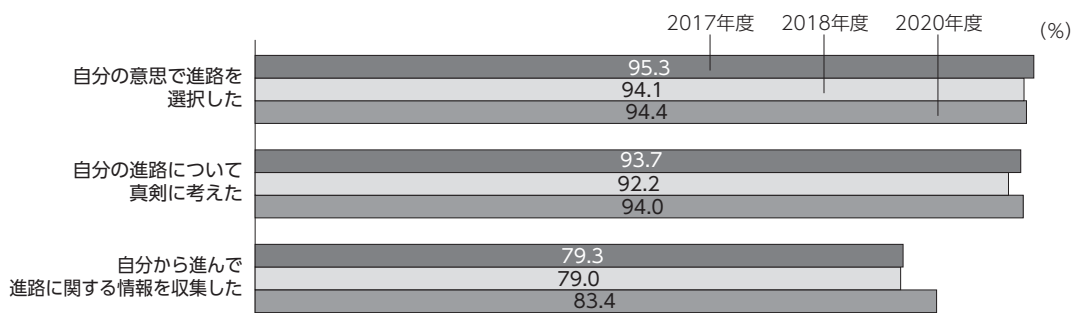
卒業後に進学するにせよ就職するにせよ、多くの場合、高校生の進路選択は個人に閉じた意思決定の中で完結するものではなく、学校や家庭における「重要な他者」(Significant others) との関わりや支えがあって、初めてなしうるものだと考えられます。また、人だけではなく、紙や場、オンラインを含めた様々なメディアを通じた資料や情報も、高校生の進路選択に欠かせない要素です。そのような観点から、本調査では、進路選択に影響した人や情報をたずねてみました【図9-10】。「資料や情報の収集」では、「オープンキャンパス（オンラインを含む）」（「とても

影響した」+「まあ影響した」の%）が大きく減少した一方で、「大学の情報（ホームページなど）」が増加しています。新型コロナウイルス感染拡大の状況下で、多くの大学や専門学校、学生を採用する企業が、これまでのリアルな場で行っていたオープンキャンパスや採用セミナーをオンラインに切り替えたことが、このような傾向に反映されています。一方、「人の意見やアドバイス」については、「母親」「父親」「塾や予備校の先生」の影響力がやや減少トレンドであった中、「高校の先生」は7割弱が「影響した」と回答しており、例年と比べて遜色がありません。ここから、進路選択に必要な進路情報のオンライン化が進む中で、高3生の進路選択にとって「高校の先生」の影響力が底堅く力を持ち続けていたと言えるのではないかと考えています。

4.3. 「勉強」や「新型コロナ影響」に対する高校生自身の捉え直し

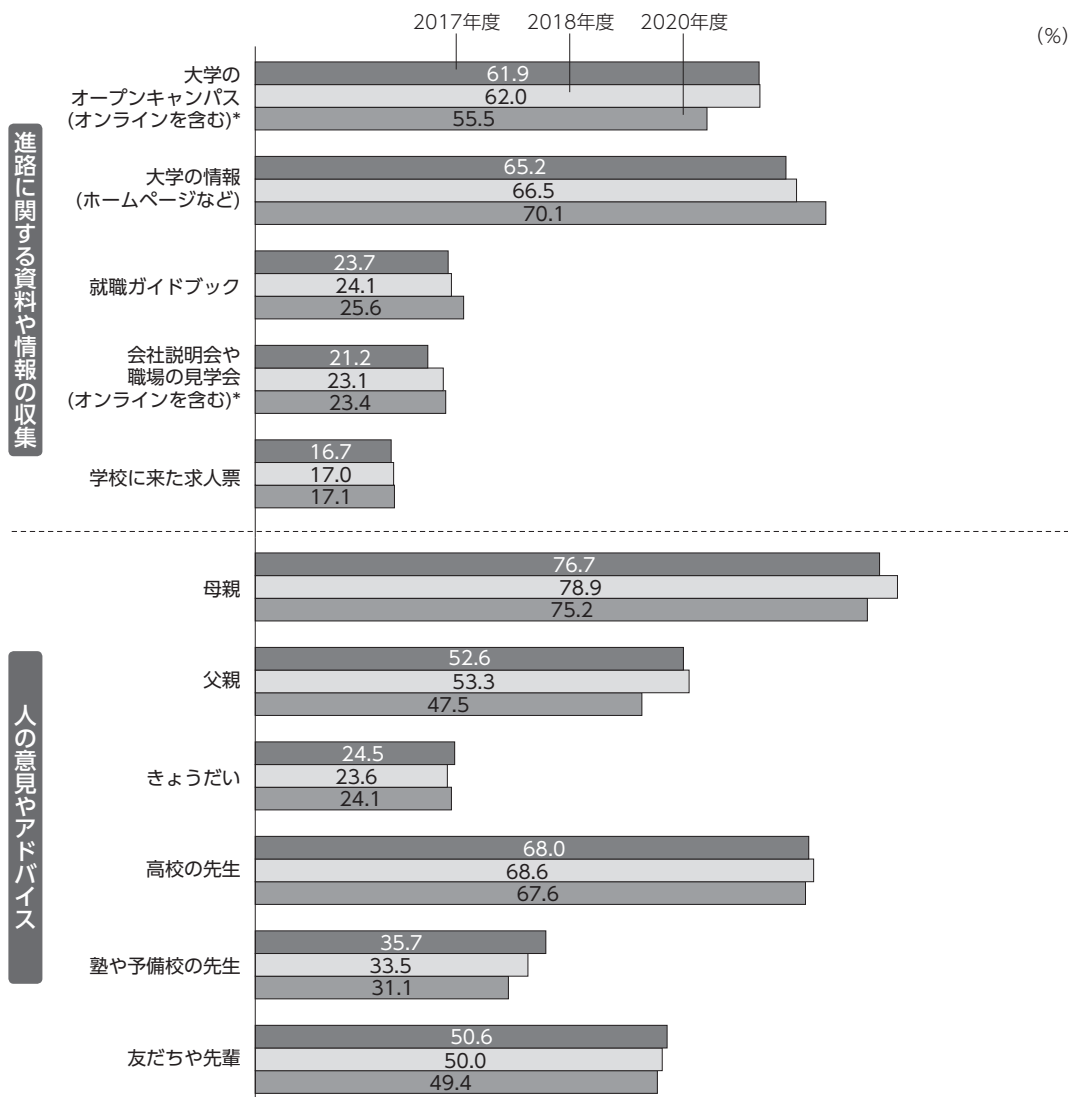
本調査では、高校3年間で成長を感じたことを自由に記述してもらった設問を用意しています。テキスト分析の結果、大きく2つのことが分かりました。第一に、2018年度に比べて2020年度は、「部活」や「受験」といったキーワードの件数や順位が下がる一方で、「考える」「行動」が上昇していること【表9-1】、第二に、「勉強」というキーワードに

図9-9 進路選択の主体性（年度別）



※ 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」の%。

図9-10 進路決定に影響した情報や人(年度別)



※「とても影響した」+「まあ影響した」の%。

※*印「(オンラインを含む)」は2020年度調査で追加した。

表9-1 高校3年間で成長したこと(自由記述の頻出キーワード分析、年度別)

	2018年度		2020年度	
	順位	件数	順位	件数
人	1	250	1	285
自分	2	241	2	248
思う	3	213	3	148
成長	4	147	5	113
勉強	5	131	4	116
部活	6	103	8	85
考える	12	69	6	94
受験	13	68	25	39
行動	24	43	14	49

※ KH Coder を用いた。

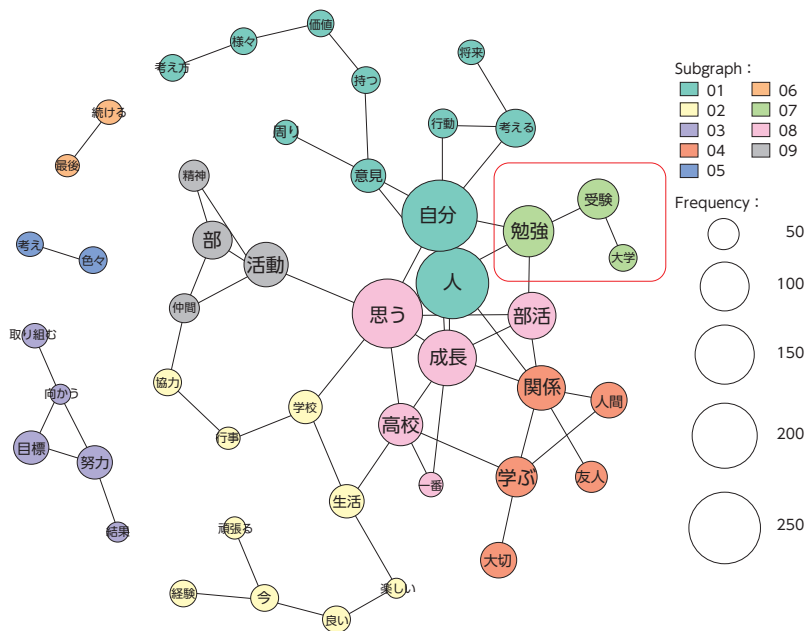
※ 2018年度・2020年度に共通する上位5項目(「人」「自分」「思う」「成長」「勉強」と、2018年度から2020年度にかけて順位や件数の変化が大きかった4項目(「部活」「考える」「受験」「行動」)を抜粋して示している。

ついて、2018年度では「受験」「大学」との結びつき（共起関係）のみでしたが、2020年度になると、「努力」「目標」「計画」「出会う」「価値」など、多様な言葉と結びつき広がりを見せていました【図9-11】。仮説の域を出ませんが、これまでは単に、「受

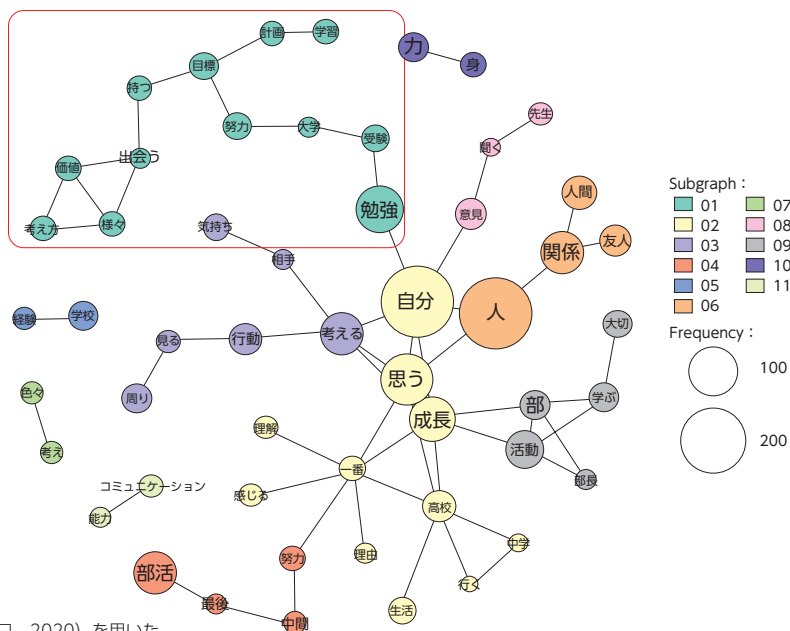
験のための勉強」という固定的な捉え方だったものが、何のための勉強かを自ら捉え直したり、勉強することの意味を自分なりに意味づけたりした結果ではないかと考えます。4.1.で指摘したように、「社会問題について真剣に考えた」高3生は例年に比べて大幅に

図9-11 高校3年間で成長したこと（自由記述の共起ネットワーク分析、年度別）

2018年度



2020年度



※ KH Coder（樋口，2020）を用いた。
 ※円の大きさは自由記述におけるキーワードの件数の多さを、棒はキーワードどうしの結びつきを表している。

増加していました。社会問題との接点の中で、「勉強すること」に対して主体的に問い直した経験が、自分の成長実感につながったのかもしれません。

次に、「新型コロナウイルス感染症が広がったことによって、あなたの進路選択にどのような影響がありましたか」とダイレクトにたずねた設問について見てみましょう。恐らくマイナスの回答が多いのではないかとこの予想とは異なり、「プラスでもマイナスでもない」というニュートラルな回答が、進路や進学先によらず6割前後を占めていました【表9-2】。2020年の夏に同一対象に実施した「中高生のコロナ禍の生活と学びに関する実態調査」(中高生コロナ調査)の結果では、新型コロナウイルス感染症の影響(影響範囲を進路選択だけに限定していない)について、過半数がマイナスを選択していました(第8章を参照)。この大きな変化の背景には、夏から年度末の約半年の間に、高3生自身が新型コロナウイルスへの向き合い方を自ら問い直したり、自分の進路選択への影響の仕方や関係性を捉え直したことがあるのではないかと考えます。

5. 依然として残る進路選択における格差

以上で見たように、コロナ禍における高3

生の進路選択は、予想とは異なり全体的にポジティブなものでした。ただし、その傾向が個人の心がけや努力によって変えられる範囲を超える側面において偏っているとしたら、それは格差や不平等といった社会の問題につながります。

調査結果から、そのような側面を少なくとも3つ指摘することができます。1つ目は、高3生本人のジェンダーによる差です。例えば、3.2. で確認した「自己肯定感」のうち、「自分の良いところが何かを言うことができる」「自分に自信がある」を男女別に集計してみた結果が【図9-12】です。するとここから、男子は大きく上昇しているものの、女子の上昇幅は相対的に小さいことが分かります。

また、【図9-13】に示した「将来について」の見通しも、「リスクがあっても高い目標にチャレンジする仕事をしたい」比率が経年で顕著に増加しているのは男子です。一方、「暮らしは人並みでも安定した仕事をしたい」比率は男子よりも女子が高い状態のままであることは何ら変わっていません。

2つ目は家庭の社会的地位(SES)の指標と見なせる世帯収入による差、そして3つ目は居住地域による差です。【図9-14】は「進路選択にあたって悩んでいること」をたずねた設問で、「経済的に進学が厳しい」への回答の肯定率(「よくあった」+「とき

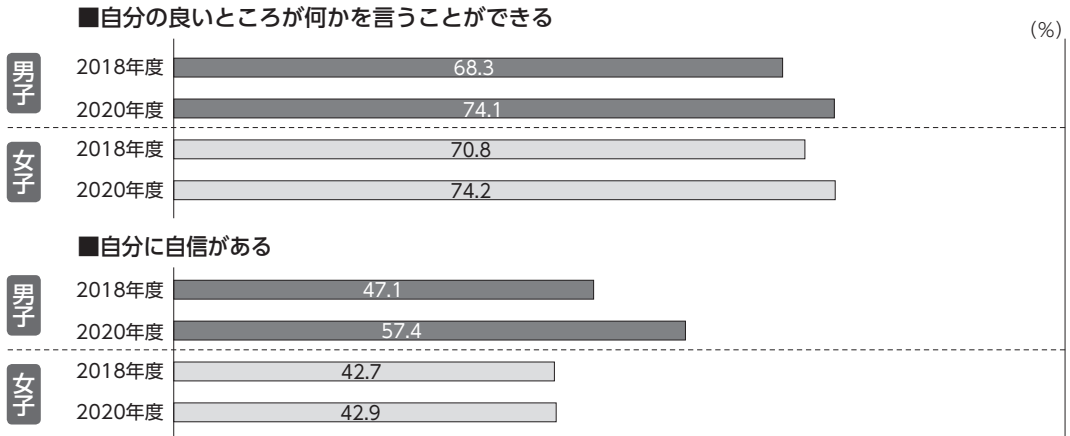
表9-2 新型コロナウイルスが進路選択に与えた影響

(全体、4月からの進路別、進学する大学の入試難易度別)

(%)

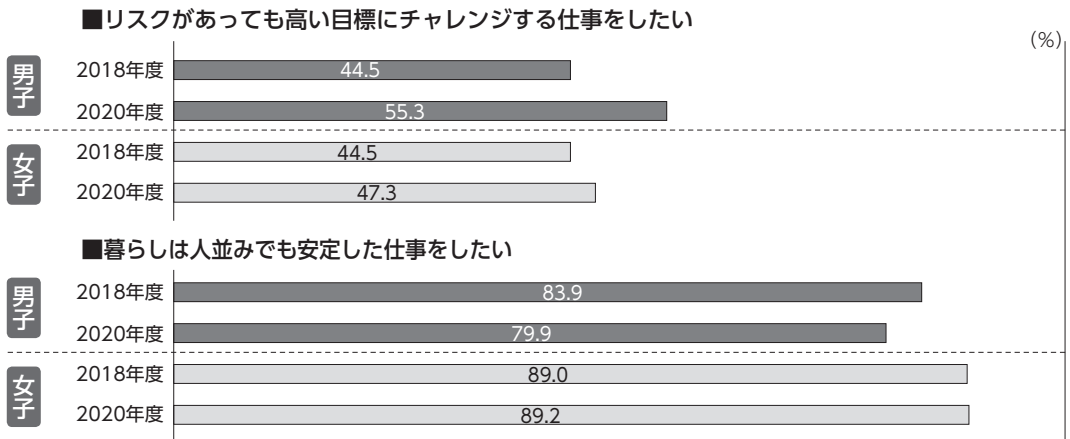
	全体	4月からの進路			進学する大学の入試難易度			
		四年制大学	専門学校・各種学校	就職	おおむね偏差値65以上	おおむね偏差値55~64	おおむね偏差値45~54	おおむね偏差値44以下
サンプルサイズ(人)	991	623	134	81	44	183	177	47
とても大きなプラス	2.5	3.0	3.0	1.2	9.1	4.4	1.1	0.0
大きなプラス	2.3	2.7	0.7	0.0	4.5	2.7	1.7	4.3
どちらかといえばプラス	9.0	10.8	5.2	3.7	11.4	15.8	11.3	4.3
プラスでもマイナスでもない	58.5	56.3	67.2	65.4	65.9	52.5	52.0	55.3
どちらかといえばマイナス	20.0	20.5	18.7	17.3	2.3	20.2	26.0	29.8
大きなマイナス	3.9	4.0	2.2	6.2	2.3	3.3	2.8	4.3
とても大きなマイナス	2.3	1.8	2.2	2.5	4.5	0.5	4.5	0.0
無回答・不明	1.4	0.8	0.7	3.7	0.0	0.5	0.6	2.1

図9-12 自己肯定感（男女別・年度別）



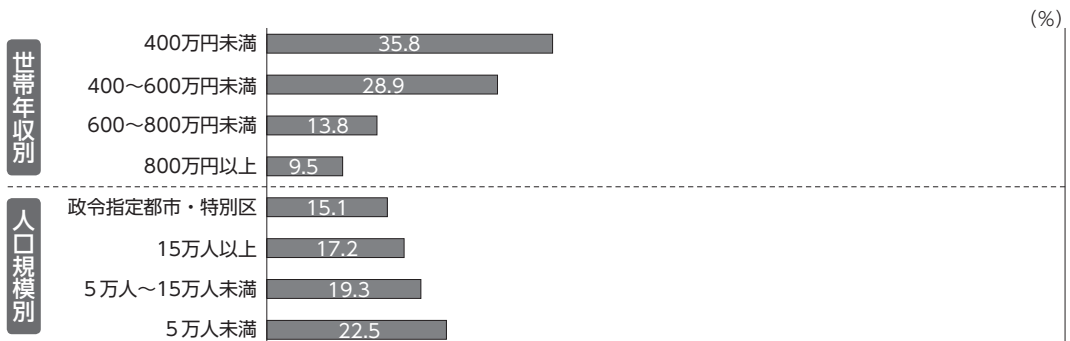
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
 ※「自己肯定感など」をたずねた図9-4の項目より、2項目のみ抜粋して示した。

図9-13 将来について（男女別・年度別）



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
 ※「将来について」の見通しをたずねた図9-6の項目より、2項目のみ抜粋して示した。

図9-14 「経済的に進学が厳しい」（2020年度の世帯年収別・人口規模別）



※「よくあった」+「ときどきあった」の%。

どきあった」の%)を属性別に示したものです。ここから、家庭の世帯収入が低いほど、居住地域の人口規模が小さく地方になるほど、「経済的に進学が厳しい」と回答した比率が高いことが分かります。つまり、家庭の経済状況や居住地域によって、進学が左右される状況が生じています。

以上に挙げた3つの側面における格差は、これまでも存在していたものです。全体的にポジティブに変化した中であっても、そのような見えにくい格差にも目を向け、課題提起していくことが必要ではないでしょうか。新型コロナウイルス感染症の収束の見通しは依然不透明であり、子どもの教育や進路選択への影響は今後も続くと考えられます。子どもたちの置かれた状況によって負の影響の大きさが異なるとしたら、確かなエビデンスに基づいて重点的にケアしていくことがわれわれに求められるように思います。

6. おわりに

本章の分析から得られたことをまとめると、以下の3点となります。

①予想(仮説)に反して、コロナ禍での高3生の進路決定はポジティブなものでした。例年と比べて「自己肯定感」や「自立に必要な資質・能力(自己評価)」は高く、自身の「将来について」の見通しや「大学生活への期待」も、決して低い水準ではありませんでした。

②その背景として考えられることは、「高校生活で社会問題を真剣に考えた経験が大幅に増加したこと」「進路選択において高校の先生からの支えが底堅かったこと」「新型コロナウイルスや勉強に対する高校生本人の捉え直しがあったこと」の3点でした。

③ただし、高校生本人のジェンダーであっ

たり、家庭の経済力や地域の差による進路選択の格差・不平等の問題が依然として残っていることも確認されました。

コロナ禍での高3生の進路選択に対して、世の中で一般的に言われていたのが、いわゆる「安全志向」と「地元志向」でした²⁾。新型コロナウイルスの感染拡大や大学入学共通テストの導入などにより、例年よりも先行き不透明感が増す中で、できるだけ早く確実に合格を手に入れたい心理が働き、「安全志向」が増加するのではないかと。また、受験や就職といった地域移動に伴う新型コロナウイルス感染リスクを回避したり、進学に伴う経済的負担をできるだけ軽減したりするために、「地元志向」が高まるのではないかと。一般的に、「安全志向」や「地元志向」という言葉の背景には、「一歩前に踏み出すことを躊躇する、受け身的な高校生」のイメージがあるように思います。しかし、今回の分析から明らかになったことは、高3卒業生の「高い自己肯定感」や「大学生活へのポジティブな期待」でした。単純に「受け身的」と切り捨てられない側面があったことを、私たちは正しく受けとめる必要があるように思います。そして、それを支持する背景理由が3つ(上記②)あったことにも、教育実践上の示唆が多く含まれるように思います。例えば、学校での学びを実際に起きている身の周りの社会問題に引き付けて生徒に考えさせたり、教員が生徒の進路選択を見守る中で、新型コロナウイルスへの向き合い方を問い直す機会を与えたりすることもできるように思います。コロナ禍の収束がなかなか見えない中、子どもの教育に携わる学校や家庭がこの経験を受け止め、次の教育実践に生かして行く価値があるのではないのでしょうか。

とはいえ、大学入試の変更・延期や新型コロナウイルス感染拡大に伴う教育現場の混乱

は、決して容認されるものではありません。分析からは、予想を裏切るポジティブな結果の一方で、依然として格差や不平等の問題が残されていることも確認されました。コロナ禍での高3生のポジティブな側面とリアルな

現実とが交錯する中、確かなエビデンスに基づく事実確認と対応とが、これからの教育を再構築していく上で、よりいっそう強く求められるはずです。

【注】

- 1) 大手予備校等が毎年発表している大学志願状況を見ると、2021年度大学入試において、私立大学志願者が大幅に減少したことが共通して報告されている。
- 2) この点に関して、インターネット記事や雑誌記事を中心に、大学入試に詳しいとされる者による経験的な見解が散見されるものの、確かなエビデンスに基づく議論は、管見の限りほとんど見あたらない。

【参考文献】

- ベネッセ教育総合研究所, 2020, 『子どもの生活と学びに関する親子調査 2020・ダイジェスト版』ベネッセ教育総合研究所。
- Erikson, Erik H., 1959, Identity and the life cycle, International Universities Press. (= 1973, 小此木啓吾ほか訳『自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル』誠信書房.)
- 樋口耕一, 2020 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— 第2版』ナカニシヤ出版。
- 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所, 2020, 『子どもの学びと成長を追う—2万組のパネル調査から』勁草書房。